

志深ミヤケの歴史的位置をめぐる基礎的考察

坂江渉

はじめに

小稿は、現在の兵庫県三木市の志染川流域にあつたといわれる「志深^{しじみ}ミヤケ」の歴史的位置について、六世紀半ば以降の倭王権の交通政策、なかでも王権を構成する有力氏族、蘇我氏の動きと結びつけて考えることをめざす。なお史料上、「しじみ」の地名と「ミヤケ」の表記についてはさまざまある。小稿では原則として右のように記す。

がう）の地名起源説話に引用される神話、伝承にもとづき、大化前代の播磨政治史研究が急速に発展した。なかでも六世紀以降、倭王権の支配の浸透によつて、播磨の地域社会構造がどのように変容したかなどの点が明確になつてきた。昨年度の本誌創刊号の特集「『播磨国風土記』研究の新地平」では、古市晃・高橋明裕・筆者の三人が、この問題に焦点をしぼり、それぞれ異なる角度から考察成果を書いた。^①

細部の結論には少なくないズレもみられるが、そこではおおむね、つぎの三点が共通認識になつたよう思う。第一に、六世紀半ば以降の播磨では、朝鮮半島情勢の緊迫化にともない、「餽磨ミヤケ」の制度的な整備、強化がすすみ、それが倭王権の播磨支配や対外的な交通路の確保にとつて、

一 ミヤケと南北間の交通路

近年、『播磨国風土記』（以下、単に風土記と略す場合がある。地名表記は原則としてこれにした

より一層拠点的（結節機能的）な役割を果たすようになつたこと、第二に、それとともに倭王権は、播磨国をほぼ南北に流れる五つの大河川（明石川・加古川・市川・揖保川・千種川）にも眼を向け、その流域ごとの拠点作り（中小ミヤケの設置や「荒ぶる神」の鎮祭儀礼の実施にもとづく開発化など）とそのネットワーク化を試みた形跡がみられること、第三に、その際には大伴氏、額田部氏、渡来系氏族など、王権から派遣された個々の中央氏族の関与が大きかつたこと、の三点である。

もとよりこれらは、従来指摘されてきた点や、さらに究明すべき課題も含まれている。しかし風土記に対する共同研究の進捗により、新たに実態究明が深まつた意義は大きい。

またこれとは別に、交通史研究の視点から、興味深い見解を提起しているのは市大樹氏である。氏は、美濃→尾張、甲斐→信濃→越後、飛騨→越中ルートなど、律令制下の駅路制度における七道間の「連絡路」、とくに南北間を結ぶそれが存在したことに着目した。それが古墳時代以来の地勢や実態にもとづく道路網を前提にしていたと指摘する。

なかでも西日本については、風土記の飴磨ミヤケの五国造伝承に光をあて、同ミヤケが仁徳朝に設定されたという点はともかくも、七道制成立以前の大化前代に、飴磨を起点とする意伎（隱岐）・出雲・伯耆・因幡・但馬の五国に通じる道路があつたと推測する。また飴磨は都へ向かう中継点になつており、ここはいわば陸上交通と海上交通の要衝にあたり、これにより後に播磨国府が置かれる要因にもなつたと述べ⁽²⁾。

このように市氏の研究でも、倭王権の大化前代の交通策や播磨での地域編成の特色をみる上で、飴磨ミヤケの重要性、および瀬戸内側と日本海側諸国とをつなぐ南北間河川沿いの水陸交通路の果たす役割の大きさに注意が向けられている。

右の飴磨ミヤケの五国造伝承は、本来ミヤケを維持するための、山陰諸国から当地への耕作労働力提供の縁起譚とみるのが妥当のようである。
しかしその一方、この史料からは、大化前代の倭王権がこのミヤケを核にしつつ、東西間の交通路（瀬戸内海沿いルート）とともに、南北間の交通路の開発・整備も志向していたことを読み取れる

ようと思う。さらにいうとそれは、六世紀半ば以降の対外的契機が横たわっているのではないか。

この点については、右の五つの国造のクニのなかに、後の「へんよう邊要國」（異国と接する辺境部の要地）の一つ、隱岐国が含まれている事が示唆的だと考える（なお後述）。

ただし西日本の南北間を縦断する交通路は、播磨以外の地域でも、倭王権形成期の初期の頃から、さまざまなルートが模索されたはずである。⁽⁴⁾またそれら全体を複合的に組み合わせるルートもあつたことであろう。

また播磨国内のルートに眼を移しても、必ずしもそれは、市川流域河口部の餽磨ミヤケを唯一の起点、ないしは通過点とする交通路だけに限定する必要はない。古くから注目されてきた日本一低い分水嶺の「ひかみかいろう氷上回廊」（加古川・由良川の道）⁽⁵⁾の存在を重んずれば、むしろ摂津から直接、播磨東部に入り、それを北上して丹波・丹後、および但馬に抜けるルートも重要であつたのではないか。

そこで改めて検討課題になつてくるのが、このルートに関わると思われる志深ミヤケと、それを

取り巻く古代の交通路のあり方である。

従来の研究では、一部の考察を除き⁽⁶⁾、志深ミヤケの歴史的位置を、その周辺地域の交通網や、対外的契機の問題とも関連付けた考察は、ほとんどみられない。この間、文献史学の立場から大化前代のミヤケを総合的に分析している仁藤敦史氏も、志深ミヤケは、「淡路屯倉」とは対照的に山間部に置かれた貢納奉仕の拠点⁽⁷⁾という見方を示している。ここではその前提にあつたはずの交通路のあり方には言及がみられない。

しかし中、近世の歴史をみると、志深とその周辺地域は、単に閉ざされた山間部の土地ではなかつた。当地には、摂津・伊丹の「こに陽昆陽」を東の起点として、西の播磨・賀古郡の「くにかね国包」に向かう幹線道、「湯山街道」⁽⁸⁾が通っていた（図1参照）。これは「表六甲」の海沿いを東西方向に走る「山陽道」（西国街道）と対をなす、「裏六甲」の基幹交通路である。さらにそれは武庫川と加古川という大河川水系の道、および「鶴越」などの小河川・谷筋の陸路を通じて、日本海側と瀬戸内海側の地域ともつながっていた。つまり志深ミヤケは、湯

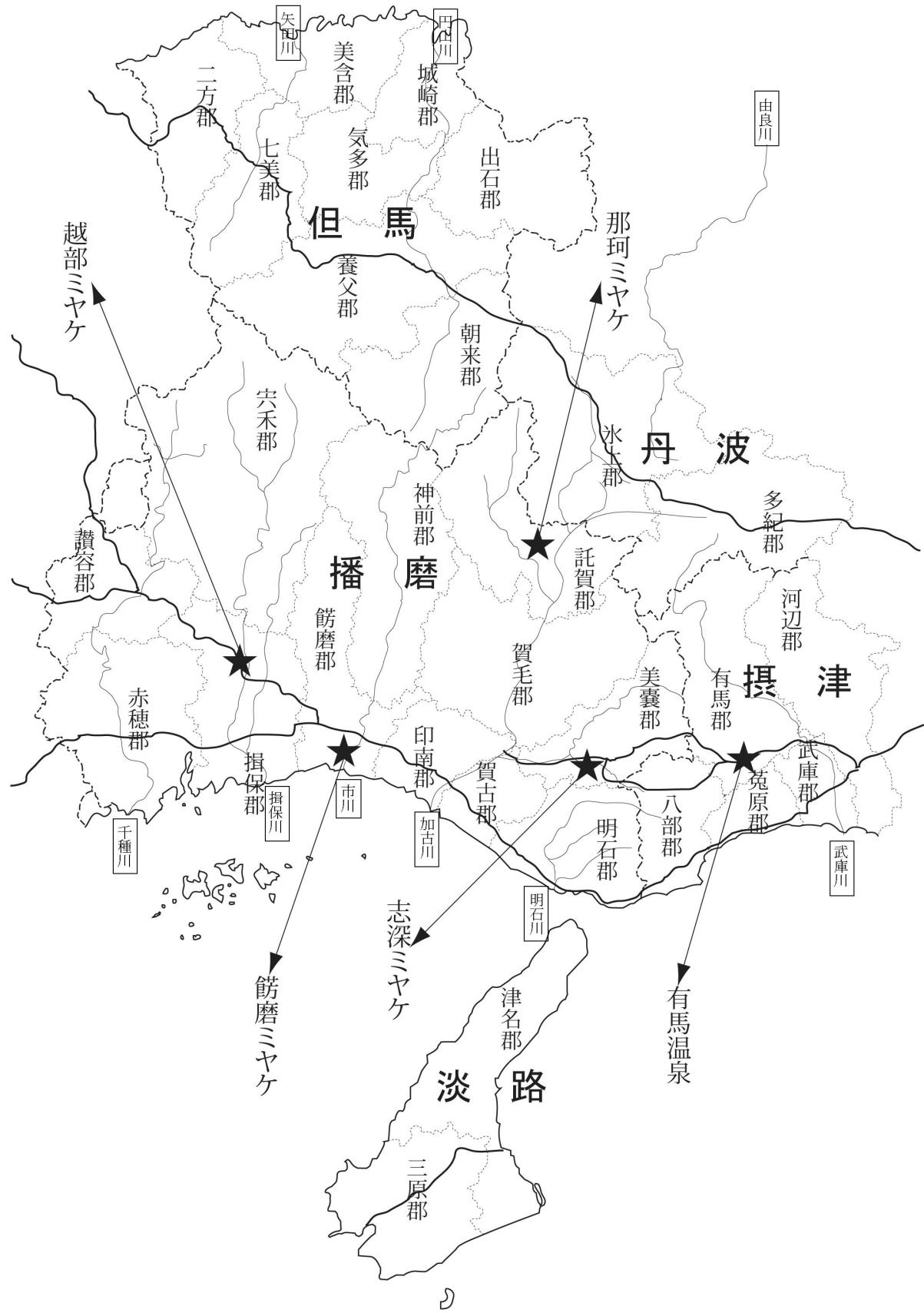


図1 兵庫県内の主要河川、幹線交通、ミヤケ推定地

山街道と、加古川水系沿い南北間交通路の交点近くに位置するわけである。

中世史家の市沢哲氏によると、平安後期以降の西摂・東播の国境地帯は、こうした交通網（氏はこれを便宜上H型交通路と呼ぶ）を媒介にして、一つの地域的なまとまりを形成していた。平氏政権や北条得宗家などの中央権力は、この地域をつねに一体的に掌握しようとしていたという。^⑨また南北朝の動乱期には、この地域の要衝地は、しばしば戦略上の係争地になつた。^⑩とくに志深の地は、この方面での戦いの雌雄を決する「丹生山攻め」の決戦で、赤松方（北朝方）の「志染軍陣」が築かれた場所であつた。^⑪

こうした後世史料をながめると、交通の要衝地としての「志染」の姿がみえてくる。そこで一つの試みとして、たとえば『住吉大社神代記』のなかで主張される、この附近の住吉社領（椅鹿山の^{そま}榎九万八〇〇〇余町）の分布状況などに眼をやると、それは基本的に右の「H型交通路」上に展開しているようみえる。この地域全体を一体的に掌握しようとする中央権力の動きは、古代にまで

遡る可能性が高い。

しかしこの問題は、王権直属の住吉大社による所領経営や地域支配、とくに九世紀以降のそれと関わっており、これ以上の深入りはしない。とりあえず小稿で検討したいのは、右の交通網のうち、とくに「湯山街道」の前身をなす交通路と、加古川水系沿いの南北路の開発、およびその拠点的施設のミヤケの整備・強化は、六世紀後半から七世紀初頭にかけて、蘇我氏の下でおこなわれたという見通しである。

もちろん当該期の文献史料は十分に揃っているわけではなく、これは仮説的見通しである。ただしいくつかの断片的な文献史料や考古資料をつないでいくと、わずかながら蘇我氏主導の姿が浮かび上がってくるように思われる。

二 蘇我氏によるミヤケの設置と「南北間」の交通路

(1) 地域開発としてのミヤケの設置

蘇我氏は、「大臣」の稻目の代の六世紀半ば頃

に台頭し、その後、馬子—蝦夷—入鹿の三代、合わせて四代にわたって大きな勢力を築いた一族であった。王権内において、仏教受容や渡来人の国内編成などを含む、対外的な問題につねに関与し、とくに政治的拠点であるミヤケの設置・整備に積極的に携わっていたことはよく知られている。

このうちミヤケについて、『日本書紀』（以下、書紀と略す）には、すでに宣化天皇の時代、稻目が尾張国（稻目）のミヤケの穀を運ばせて、「筑紫の那津（那津）の口」にミヤケを「修造」たとの記事がみられる（宣化元年五月辛丑朔条）。これは朝鮮半島の対外的緊張を背景にした、那津ミヤケの兵站基地化の動きの一環をなすと解されている。^{〔12〕}しかし同氏が本格的に諸ミヤケの設置に着手したのは欽明朝の対外的危機、すなわち倭王権の同盟国の百濟・聖明王が、欽明一五年（五五四）一二月、新羅によって殺害され、同王朝が一時的に滅亡した直後からであった。

翌年の欽明一六年（五五五）二月には、百濟王子の恵^{けい}が来日し、聖明王の死を報じ、それに対しても「蘇我臣」と「許勢臣」が今後の国策について

尋問している。ついでその五ヶ月後、同年七月、「蘇我大臣稻目宿祢」と「穗積磐弓臣」らが吉備五郡に遣わされ、「白猪屯倉」が置かれる（『書紀』同年七月壬午条）。翌年（五五六）の七月己卯条の『書紀』には、「蘇我大臣稻目宿祢らを備前の児島郡に遣わして、屯倉を置かしむ。葛城山田直瑞子を以て田令となす」（原漢文。以下も同じ）という記事がみられる。さらに敏達朝三年（五七四）には、今度は、「蘇我馬子大臣を吉備国に遣わして、白猪屯倉と田部とを増益せしむ。すなわち田部の名籍を以て、白猪史胆津に授く」（同、同年一〇丙申条）とあり、そして翌年（五七五）二月、馬子は都に帰り、ミヤケの復命をおこなつたと記されている（同、敏達四年二月壬辰朔条）。

このように六世紀後半の新羅の強大化という対外的危機のなか、蘇我氏は稻目と馬子という「大臣」自らが現地に赴き、吉備のミヤケの設置・整備策を直接的に指揮した。吉備のミヤケは、地理的にみて、難波（子代ミヤケ）と筑紫の那津ミヤケを結ぶ径路上の中間地点になる。まさに朝鮮半島問題に対処する中継基地としての役割を担つた

と思われる。したがつてそれらのミヤケには、津や客館など、外交に関する重要施設が設けられていた。また右の記事に「田令」の派遣や、白猪史氏への「田部の名籍」の授与などがみられたように、それらを維持・管理するための農業経営体も敷設されていた。

つまりこの時期、蘇我氏主導で各地に設置されたミヤケは、王権による直接的かつ先進的な技術にもとづく大規模地域開発の側面も有していた。

山尾幸久氏は吉備ミヤケのほか、欽明紀の紀伊の海部ミヤケ、倭国の大身狭ミヤケ、さらには古市大溝や当麻・丹比道なども、蘇我氏による大規模な地域開発策の一環をなすと説いている。¹³⁾

(2) 「南北間」の交通路

以上のように、『書紀』にもとづくと、六世紀半ば以降の蘇我氏は、新羅の強大化に対応すべく、筑紫の那津ミヤケの強化とともに、王権中枢部とその周辺地帯の開発、さらにはその双方を結ぶ東西方向（瀬戸内海）の主要径路の要衝地で、積極的なミヤケ設置策を主導していたことが分かる。

しかし蘇我氏は、単にそれだけに留まらず、日本海側に向かう南北間交通路の開発・整備を試みていた痕跡がみられる。その素材として着目したいのが、「ソガ」（蘇我・蘇宜・宗我・宗吾なども）の語句を冠する、氏族名・郷名・式内社などの分布状況である。

これを用いた先駆的研究としては、すでに加藤謙吉氏による考察がある。その成果を踏まえ、さらに現段階のソガ関連資料も拾い上げてみると、その総数は畿内を除く、合わせて三〇以上の地域（郡）に及んでいる。これを国別でみると、トータル二一国となり、もつとも例数の多いのは、やはり瀬戸内海沿岸・西国地域（山陽・南海・西海道）の国々である。全体の半数近くにのぼっている（総計一〇国一四郡）。これに関連してかつて加藤氏は、「蘇我氏勢力の分布が大和王権の朝鮮経略と確実に対応することが明らか」と評価しているが、現時点でも首肯されるべき見方であろう。ただし氏のいう「朝鮮経略」との関連で注意されるのは、山陰道諸国の関連資料が比較的多い事実と、そのなかに隱岐国が含まれる点である。具

体的にみると、まず丹波国の桑田・多紀・天田の三郡に、「宗我部（宗部）郷」が存在し（『倭名類聚抄』）、但馬国では出石・氣多・城崎の三郡には、「宗我部」を名乗る氏族が居住していた（大日本古文書・兵庫県祢布ヶ森遺跡出土木簡・二条大路木簡）。さらに隠岐国では、周吉郡に「宗我部」が居住していた事実がみられる（平城宮木簡）。全体の例数が少なすぎる感もあるが、これによると、あたかも丹波国桑田郡を起点にして、後の山陰道ルートを丹波→但馬とすすみ、最終的には日本海上の隠岐国に向かう、蘇我氏の伸展径路を想定できるのではないか。

（3）隠岐国のみやけ・ミタの設置

このうち隠岐国との関連で留意したいのは、同国の海部郡に「三家里」（みやけ）、「神宅郷」（みやけ）、評制下の智夫（ちふり）郡において「三田里」と表記する出土文字資料を確認できることである（二条大路木簡、藤原宮木簡など）。『書紀』に関連記事はみられないが、大化前代の隠岐国には、「ミヤケ」とそれに付随する「ミタ」（屯田）が置かれていたことは明らか

であろう⁽¹⁵⁾。同じ国内に蘇我系の部民がいることからみて、これを推進したのは蘇我氏だつたと推定してよいのではないか。蘇我氏は、後世の山陰道の終着点にあたる当地で、農業経営体（屯田）をともなう拠点的な施設を設け、この地域の開発にあつたのであつた。

ただし問題になるのは、宗我部の居地の周吉郡は、隠岐諸島のなかの島後に属し、一方、ミヤケ・ミタの比定地の海部郡と智夫郡は、島前に位置する点である。しかし考古学的にみると、智夫郡のミタ（三田里）の比定地付近の西ノ島町の立石一号墳からは、後述する蘇我系の舶載大刀といわれる「双龍環頭大刀」が発見されている。⁽¹⁶⁾また『新撰姓氏録』（河内国皇別）によると、ミタに居住する磯部氏は、蘇我氏と同祖系譜をもつ一族だった。これにもとづき蘇我氏は、この智夫郡の磯部氏と周吉郡の宗我部を媒介にして、ミタとミヤケの設定に成功したと見る見解が出されている。⁽¹⁷⁾

これが正しければ、六世紀後半の蘇我氏は、国史には記されないが、後の山陰道のターミナルである隠岐国においても、ミヤケとミタを設定し、

朝鮮半島の緊迫した情勢に対応しようとしたと理解できるのではなかろうか。

隱岐国は鰯や海藻の貢進に代表される「御食国」であるから、このミヤケの役割を海産物貢納に限る定させる考えがあるかも知れない。しかし「隱岐

鰯」は、もともと外交儀礼に関わりが深いことが指摘されている。¹⁸⁾しかも前述のように、隱岐国は、国家領域外の勢力と接する軍事的要地と觀念される「邊要國」の一つだつた点を看過できない。¹⁹⁾

『延喜式』卷二二の民部上には、「陸奥国・出羽国・佐渡国・隱伎国・壱伎島・対馬島。右、四国二嶋を邊要と為す」とあり、また貞觀一一年（八六九）の史料では、「邊要に在りて、²⁰⁾堺新羅に近し。警備の謀、まさに他国と異なるべし。宜しく早く下知して、殊に警護せしむべし」（『類聚三代格』卷五、同年三月七日太政官符）と記されている。さらに「邊要」には、東辺・北辺・西辺の三つがあり、このうち東辺は陸奥、北辺は出羽・佐渡、そして西辺は隱岐・壱岐・対馬が該当すると説かれている。²⁰⁾つまり隱岐国は、壱岐・対馬と並び、西辺の要と意識されていたわけ

である。これまで小稿では、隱岐国への道を、しばしば「南北間」の交通路の開発などと述べてきた。しかし古代王権の立場から巨視的にみて、あくまでそれは西の邊要地に至る道の開発であつたことを意味する。

もちろん隱岐国の法制上の邊要國化は、九世紀以降だつた可能性がある。だが『古事記』上巻の「國生み神話」では、隱岐国は「隱伎之三子島」として、同じ邊要國の佐渡・対馬・壱岐などと一緒に、「大八島國」の一つにカウントされている。このようない宮中神話のあり方、および地勢学的な位置から考えて、隱岐国を異國の勢力、なかでも新羅と對峙する、軍事・外交上の西の要地の一つと見做す考えは、すでに大化前代から存在したのではないか。大局的にみて、蘇我氏は王権の全体的利害を守るという目的で、西の要地を固める政策の一環として、筑紫・西國と、隱岐国とのミヤケ・ミタの設置に着手したと思われる。

三 志深ミヤケと周辺交通路の整備

蘇我氏による「南北間」交通路の開発・整備策の一断面を、隱岐国に向かう、後世の山陰道ルートを素材にして述べてきた。そのような交通政策の展開のなかで、播磨国ではどのような事態を読み取れるのであろうか。

結論的にいようと、右と同じ頃、蘇我氏は、一つに、摂津の難波から現在の伊丹・宝塚経由で武庫川水系に入り、蓬萊峠（ほうらいきょう）を通つて有馬温泉を経過して、志深ミヤケに至るルートと、もう一つは、志深ミヤケからやや西に向かつた附近で交差する加古川水系の道を北上し、さらに丹波・但馬に至るルートの開発を推進したのではないか。この二つの道は、まさに志染ミヤケ近くで交わつて一つにつながり、さらにそれは丹波国において、右に述べた山陰道のルートと接合していた。

（1）託賀郡におけるミヤケ開発

このうち播磨から丹波に向かう加古川水系のルートで、ミヤケ設置をともなう蘇我氏主導の拠点的開発の対象地域は、播磨国の託賀郡（多可郡）であつた。ここではまず蘇我氏の進出を示すつぎの

二つの文字資料に注目したい。

一つは、「宗我部小敷（年十九）／播磨國多可郡奈何郷戸主宗我部老人戸口」と記される天平一七年（七四五）の優婆塞貢（うばさきよん）進文である（正倉院文書）。もう一つは、右の「奈何郷」（那珂郷）に比定される現在の多可町中地区の「曾我井・沢田遺跡」（集落遺構）から、「宗我」「宗我西」と書いた八世紀前半の墨書土器が出土していることである（兵庫県立考古博物館編『兵庫県埋蔵文化財調査報告第四三四冊 曽我井・堂ノ元遺跡 曽我井・野入遺跡 曽我井・沢田遺跡』〈兵庫県教育委員会、二〇一二年〉）。さらにこの奈何郷についてには、「播磨國多可郡中郷三宅里／日下部漢目庸米六斗」という木簡が見つかっていることも重要である（二条大路木簡）。つまり律令制下の託賀郡の那珂郷には、かつてミヤケが設置され、そこには蘇我氏が強く関与していた事実が浮かび上がってくる。『書紀』に関連記事はみられないが、ここでもミヤケを核にした大規模な地域開発がおこなわれたとみるべきであろう（以下、便宜上これを那珂ミヤケと呼ぶ）。

こうした那珂ミヤケでの大規模開発の実相を、

当地の後期古墳（妙見山麓の東山古墳群）と集落遺跡（旧中町の平野部）のあり方を素材にして明らかにしたのが、考古学者の菱田哲郎氏であった。氏によると、まず東山古墳群の横穴式石室の大型化と階層化、および集落開発の展開にとって大きな画期になるのは、七世紀初頭だったという。

この背景には、蘇我氏が関与する「屯倉型の開発」があつたと氏は読み解く。考古学的にみてその頃、那珂の地域では、渡来人を含む大規模な入植と移住とを看取でき、まさに先進的技術にもとづく平野部開発がおこなわれたと説く。また開発された集落地から少し離れた「名山」である妙見山の麓の東山古墳群は、後の託賀郡の郡司層をその被葬者として想定できるという。

さらに国史などに記されるミヤケについて、それは各地に普遍的に存在したミヤケの「氷山の一角」に過ぎない。従来の地域社会の慣習とは異なる遺構や遺物を、顕著に見いだせる場合、そこには文献史料ではうかがえない「屯倉型の開発」を見いだすことが許され、その事例の一つが、那珂

ミヤケにおける地域開発だったと強調する。²¹⁾

古墳時代後期の託賀郡をケーススタディにした菱田氏の考察は説得的であり、国史などには載らない、蘇我氏主導のミヤケ型の開発の実態が、考古学的手法にもとづき浮かび上がったように思われる。菱田氏の見方を積極的に支持したい。

このような大規模開発がおこなわれた旧中町の平野部は、南北間を貫流する加古川本流からやや北西方向にそれた支流域、杉原川流域に属する地域である。あえてここが開発対象地になった理由は、おそらくこの地域が古くからの「氷上回廊」（加古川・由良川の道）とは異なる新たな交通の結節点、すなわち前述の山陰道につながる所として意識されたからであろう（図1参照）。

平野部を流れる杉原川を北上して現在の「播州峠」を通過すると、丹波国の氷上郡佐治郷へ、また「小野尻峠」や「石原坂」などを東行して一旦古川本流域に入り、それを北に向かっても氷上郡（西縣）へ入ることができる。そして氷上郡では但馬国に向かう山陰道との接続が可能となる。また平野部北西の奥荒田地区から西行して「高坂峠」

を越えると、比較的簡単に市川流域の神前郡域に至ることもできた。いずれにせよこの地域が、從来とは異なる新たな交通の結節点と認識されたことが、ミヤケの設置につながったのだと思われる。

(2) 有馬温泉の「開発」

それではこうした加古川水系の道に結ばれる、「裏六甲」の東西方向の道の開発・整備について、蘇我氏が関与したことを見いだせるのであろうか。

この点についてまず筆者は、現在の有馬温泉をめぐる『摂津国風土記』逸文〔『釀日本紀』卷一四〕の伝承に着目したい。この史料では地名由来が語られた後、引き続く最後の箇所で、「又曰く、始めて塩の湯ども見得たるはと云々。土人の云く、時の世の号名を知らず。但し、嶋の大臣しま（くにひと）の時と知れるのみと」と伝えている。

古代の有馬温泉（有間溫湯）^{ありまのゆ} というと、『書紀』の舒明三年（六三一）九月乙亥条を初見記事とする、舒明天皇や孝徳天皇による「湯治」行幸先として有名である。直木孝次郎氏は、六甲山系の北

側の有馬郡が、摂津国（津国）に編入された理由として、天皇によるたびたびの湯治行幸があつたからだと説き、有馬温泉は「保養地として天皇家のかかわりの深い地であつた」と指摘している。またこれに関連して足利健亮氏は、難波から有馬温泉をめざす直線的な計画古道、「有馬古道」の存在を明らかにした。²³⁾

たしかに当時の有馬温泉が、保養地（湯治場）の一つとして利用されていたのは明白で、また足利氏の復元案も貴重な成果として継承されるべきものである。しかしその一方、右の風土記逸文で、伝聞形式ではあるが、当湯が開かれたのは、舒明天皇の行幸の初見史料より前の、「嶋の大臣」（蘇我馬子）の時代と記される点は看過できない。

これまでの小稿の考察結果にもとづくと、おそらく蘇我馬子は、有馬温泉という湯治場の開発とともに、その西の延長線上にある志深ミヤケに至る交通路の開発・整備のため、当地をその中継点として確保することもめざしていたのではないか。つまり足利氏が想定した難波からの古道は、有馬温泉のみならず、その西側にある播磨美嚢郡の

志深ミヤケ方面につながる道だったと考えられる。旧来ほとんど指摘されていない見方であるが、ここでは右の風土記逸文の伝承の意味をこのように捉えておきたい。

(3) 志深ミヤケと蘇我氏の関わり

つぎに問題の志深ミヤケの関連史料をみると、たとえば『播磨国風土記』の説話では、志深里の「三坂」²⁴⁾の存在や、「三坂峯に坐す神」などの記述がみられる。したがって志深の地に、摂津国との国境をなす「坂」(峠)を往来する交通路があつたことは確実であろう。

ただし当地の居住氏族としては、「忍海部造細目」(『書紀』顯宗即位前紀)や、「志深村首の伊等尾」(『播磨国風土記』美嚢郡志深里条)などが確認されるものの、宗我部などの一族名を見いだせない。そこで志深ミヤケをめぐる、有力先行字説の山尾幸久説でも、志深の地は、この附近の韓鍛冶集団を統合する土豪、忍海造氏の本拠地であり、彼らは大和の葛城勢力や吉備集団との強い結びつきをもつていたと説かれている。²⁵⁾

このうち葛城勢力との結びつきに関しては、志深ミヤケの比定地近辺の三木市志染町窟屋所在の「窟屋一号墳」(六世紀後葉築造の円墳)の出土遺物が注目される。そこからは古墳時代の多くの須恵器・土師器・鉄鎌などとともに、長さ一九cmの木棺用の鉄釘、および「金銅装单鳳環頭大刀」の柄頭が見つかった。

分析の結果、右の木棺用の鉄釘は、奈良県葛城の寺口忍海古墳群などで顕著に出土している釘と同系列であることが判明した。これにより考古学的に、当地と葛城北部の忍海地域との強い関連性が想定されるのは当然であつた。調査報告書でも、「窟屋1号墳出土の鉄釘が奈良盆地西南部の忍海地域と関連が深いとする『日本書紀』に志染地域の在地有力者として「忍海部造」が記載されていることは偶然とは思えない」と記されている。

しかしその上で筆者が気にかかる点は、窟屋一号墳の築造時期が六世紀後葉である点である。これは葛城集団の本宗家が、雄略天皇により滅ぼされてから、約七、八〇年近く経過している。木製棺の鉄釘の使用は、葛城北部における工人集団や

その技術・権益を引き継いだ、後継氏族と当地の勢力との関係として捉えるべきではないか。

この点でさらに眼を向けたいのは、柄頭が出土した「金銅装单鳳環頭大刀」である。いわゆる装飾付環頭大刀の盛行時期は、六世紀後葉～七世紀初頭だったと推定されている。²⁶⁾ ここからも葛城集団そのものではなく、その後継一族との間の大刀のやりとりを想定すべき可能性が出てくる。

筆者はその後裔氏族について、通説的な見解にしたがい、蘇我氏と考るが、この点で装飾付環頭大刀についての清水みき氏の見解に注目したい。氏は京都府久美浜町の「湯舟坂2号墳」で出土した環頭大刀をめぐる文献史的考察を加えた。

その結果、それが天平勝宝八歳（七五六）の『東大寺献物帳』や、『万葉集』（卷二一九九）などにみえる「高麗様大刀」「狛劍」^{こまつるぎ}と呼ばれるものだと指摘する。そして『書紀』欽明二三年（五六二）八月条に、軍事派遣先の高句麗から帰国した大伴連狭手彦が、蘇我稻目に「金飾刀二口」を献上した記事があることなどにより、六世紀後半以降、環頭大刀を実質的な支配下におき、独占的に

掌握していたのは蘇我氏だつたと理解する。²⁸⁾ 清水氏が環頭大刀を蘇我氏の独占的掌握物とみるのはやや断定的であり、たとえば右の『書紀』の記事で、蘇我氏に「金飾刀二口」を献上したという大伴氏の関与の可能性も浮かんでくる。ただし当時の大伴氏は、親蘇我氏的な立場、ないしはその系列下に置かれていたようであり、環頭大刀と蘇我氏の関係性は否定できないのではないか。

このように近年の考古学の学術成果に眼をやると、志深の地元勢力と、雄略朝に没落した葛城勢の旧領や技術、あるいは人的資源やネットワークを継承した蘇我氏との間において、一定の結びつきがあつた痕跡を読み取れる。もちろん「金銅装单鳳環頭大刀」を副葬する窟屋一号墳の被葬者が、志深ミヤケを管理する一族だつたことを直接示す根拠はない。だが新しい考古資料にもとづき、とりあえずこのように解釈しておきたい。

結局、志深の地に、当初進出したのは五世紀代に栄えた葛城集団であつたが、それを引き継ぎ、後世の湯山街道に相当するルートの掌握と、その後点的な地域開発（有馬温泉と志深ミヤケ）にあ

たつたのは、六世紀半ば以降の蘇我一族であったと理解されるであろう。

おわりに

以上、三章にわたる考察結果をまとめると、つきの通りである。

第一に、六世紀半ば以降の蘇我氏は、倭王権全体の対外的危機、すなわち新羅の強大化に対峙すべく、筑紫・吉備などを拠点とする西国、瀬戸内海沿いの交通路の確保とともに、日本海側に抜け道、とくに「辺要」の地である隱岐国に向かう複数の「南北間」ルートの整備策を主導したと考えられること、第二に、このうち隱岐国は西の「辺要国」と位置づけられたいた可能性が高く、ここでの開発は、西辺の要の強化・整備策の一環をなすと捉えられること、第三に、播磨近辺で日本海側に向かう道として確認できるルートは、少なくとも二つあり、一つは、後の山陰道、もう一つは、「西摂（）東播（）丹波」の道である。このうち後者は、前者の山陰道に接続し、志深ミヤケ、

および那珂ミヤケの歴史的位置は、このルート上で拠点的・結節点的な役割をもつていたと理解できること、第四に、このほかにも「飫磨ミヤケ」を起点として、隱岐国などに至る道もあつた。つまり蘇我氏は、倭王権の中核部から日本海側に至るコースを複数開発したり、あるいはそれを複合的に組み合わせるルートを作ることにより、対外的危機に対し、より弾力的に対応しようと考えていたと思われること、の四点である。

従来の研究では、播磨東部や北東部のミヤケや、それを取り巻く交通路の問題については、ほとんど言及されてこなかつた。古代の播磨国は、いわば地域全体が交通の要衝地と位置づけられるところである。今後、地域社会論一般だけでなく、こうした地域社会の個性や特性を明かしていく作業に取り組んでいきたい。

〈附記〉 小稿執筆に向けてのフィールド調査において、多可町教育委員会の安平勝利氏、西脇市教育委員会の菅澤敏弘氏、丹波市立植野記念美術館の徳原多喜雄氏には、格別のお世話をなつた。この場を借りて厚く御

札申し上げる。

- (1) 古市 「『播磨国風土記』と五・六世紀における飾磨地域の結節機能」、高橋 「『播磨国風土記』からみた東播・西摂地域と交通——印南野の歴史的位置」、坂江 「『播磨国風土記』の地名起源説話と「伊和大神」の神話」。いずれも『ひょうご歴史研究室紀要』一(二〇一六年)に所収。なおこれに先行する重要な研究成果の一つとして、中林隆之「石作氏の配置とその前提」(『日本歴史』七五一、二〇一〇年)がある。
- (2) 市「律令制下の交通制度」(館野和己、出田和久編『日本古代の交通・交流・情報1』)(吉川弘文館、二〇一六年)。
- (3) 高橋明裕 「『播磨国風土記』にみる六・七世紀、播磨の地域社会構造」(『歴史科学』二二〇・二二一合併号、二〇一五年)。
- (4) 今津勝紀 「吉備をめぐる予備的考察」(鈴木靖民編『日本古代の地域社会と周縁』)(吉川弘文館、二〇一二年)。
- (5) 佐原眞 「大和川と淀川」(『古代の日本』五)(角川書店、一九七〇年)、種定淳介 「加古川と由良川——モノの移動について」(『横山浩一先生退官記念論文集I 生産と流通の考古学』)(横山浩一先生退官記念事業会、一九八九年)、春日町歴史民俗資料館・
- (6) 『兵庫県史』一(一九七四年)第六章第二節4 「交通の発達」(直木孝次郎氏執筆分)。
- (7) 仁藤『古代王権と支配構造』第二編第二章「古代王権とミヤケ制」(吉川弘文館、二〇一二年。初出は二〇〇五年)、一六五頁。
- (8) 野村貴郎『北神戸 歴史の道を歩く』(神戸新聞総合出版センター、二〇〇一年)。
- (9) 市沢「南北朝内乱からみた西摂津・東播磨の平氏勢力圏」(史料ネット編『地域社会からみた「源平合戦」——福原京と生田森・一の谷合戦』)(岩田書院、二〇〇七年)。
- (10) 山下道雄「南北朝期の摂播国境の戦い」(『歴史と神戸』二〇一一、一九八一年)。
- (11) 兵庫県立考古博物館編『兵庫県文化財調査報告第四〇九冊 吉田住吉山遺跡群 本文・図版編』(兵庫県教育委員会、二〇一一年)、二五三頁。
- (12) 仁藤敦史「欽明朝の王権と出雲」(『出雲古代史研究』二六、二〇一六年)。
- (13) 山尾幸久「蘇我氏の発展」(黛弘道編『古代を考える 蘇我氏と古代国家』)(吉川弘文館、一九九一年)。
- (14) 加藤『蘇我氏と大和王権』(吉川弘文館、一九八三

年)、一二三五頁。

一一四頁。

(15) 佐藤信『日本古代の宮都と木簡』Ⅲ 第六章「古代隱岐国と木簡」(吉川弘文館、一九九七年。初出是一九八六年)。

(16) 大谷晃二・松尾充晶「島根県 装飾付大刀と馬具出土古墳・横穴墓一覧(改訂版)」(『島根考古学会誌』二〇・二一、一〇〇四年)。

(17) 吉松大志「6～7世紀の隱岐の古墳・横穴墓と部民」(島根県古代文化センター・テーマ研究「国家形成期の首長権と地域社会構造」第五回共同検討会での口頭発表、一〇一六年)。

(18) 中林隆之「東大寺領封戸の形成と皇后藤原光明子一二条大路木簡の検討を手がかりに」(『国立歴史民俗博物館研究報告』九三、一〇〇一年)。

(19) 大日方克己「古代における国家と境界」(『歴史学研究』六一三、一九九〇年)。

(20) 宮原武夫「律令国家と辺要——班田免除と租調庸賦課——」(田名網宏編『古代国家の支配と構造』(東京堂出版、一九八六年))。

(21) 菱田「7世紀における地域社会の変容——古墳研究と集落研究の接続をめざして」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一七九、一〇一三年)。

(22) 直木『日本古代の氏族と国家』IV-1 「摂津国の成立」(吉川弘文館、一〇〇五年。初出は一〇〇一年)、

(23) 足利『日本古代地理研究』第五章第二節「難波京から有馬温泉を指した計画古道」(大明堂、一九八五年。初出は一九七八年)。

(24) 山尾『日本古代王権形成史論』IV 篇七章「倭王権による近畿周辺の統合」(岩波書店、一九八三年)。

(25) 兵庫県立考古博物館編『兵庫県文化財調査報告第三五三冊 窟屋1号墳』(兵庫県教育委員会、二〇〇九年)、五八頁(池田征弘氏執筆分)。

(26) 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター編『島根県古代文化センター調査研究報告書三一 装飾付大刀と後期古墳』(同、一〇〇五年)、三頁(松尾充晶氏執筆分)。

(27) 加藤謙吉『大和の豪族と渡来人——葛城・蘇我氏と大伴・物部氏』(吉川弘文館、一〇〇二年)、吉村武彦『蘇我氏の古代』(岩波新書、二〇一五年)、倉本一宏『蘇我氏——古代豪族の興亡』(中公新書、二〇一五年)など。

(28) 清水「湯舟坂2号墳出土環頭大刀の文献的考察」(久美浜町教育委員会編『湯舟坂2号墳』(同、一九八三年))。

(29) 註(14) 加藤前掲書、一〇三頁。